

山村美紗

京都婚約旅行
殺人事件

中公文庫



中公文庫

きょうと　こんやくりょこうさつじん　じけん
京都婚約旅行殺人事件

定価はカバーに表示してあります。

1997年9月3日印刷

1997年9月18日発行

著者　やまむらみさ　山村美紗

発行者　笠松　巖

発行所　中央公論社　〒104 東京都中央区京橋 2-8-7　振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA,INC. / Yamamura Misa Office

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-202935-X　C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

京都婚約旅行殺人事件

山村美紗



中央公論社

目次

第一章	レイプ	7
第二章	秘密の夜	33
第三章	婚約指輪	58
第四章	京都旅行への誘い	83
第五章	密室殺人	108
第六章	密会	133

	第七章	誕生祝いのパーティ	159
	第八章	新しい殺人	183
	第九章	もう一人の男	207
	第十章	真相	232
	第十一章	京都への旅	256
	第十二章	迷路	280
	第十三章	新婚旅行	304
解説			329
山前議			

京都婚約旅行殺人事件

D
T
P 制作
オフィス・トイ

第一章 レイプ

1

林由美は、京都への旅に出た。

大学生活もあと数か月で、就職もきまったからと友だちや両親にはいったが、本当は、失恋の悲しみをまぎらわせるためである。

二年近くもつき合っていた中原次郎が、大手の銀行に就職が内定してから、急に冷たくなったのだ。

考えてみると、そのきざしは、六月頃ごろからあったように思う。

就職運動で忙しいからと、デートが途切れがちになったとき、気づくべきだったのに、由美は、彼の言葉を信じていた。

別れ話を彼が持ち出したのは、十月になって彼の部屋に行ったときだった。

「君とつき合った二年間は、とても楽しかったよ。思い出も一杯ある。でも、結局、^{からだ}軀の関係はなかったよね。残念だけど」

彼は、軽く切り出した。

「だって、妊娠したりしたら、大学やめないといけないでしょう？　うちは、堅い家庭だし、そんなことになったら、家中大さわぎになって、あなたと二度と会えなくなるわ。だから、卒業まで待つてといったのよ」

由美は、何も気づかず甘えた口調でいった。

卒業して就職したら、彼に家に来て、結婚の申し込みをして貰^{もら}い、正式に婚約したいと、彼女なりに、夢を描いていたのだ。

へ婚約したら、^{からだ}軀を許してもいいわ。親が反対したら、家出をしてもいい」とも、考えていた。

そして、そのことは、彼にも充分話していたはずである。

「男は、そういうの嫌いなんだよな。計算された通りに動くというのが。鉄は、熱いうちに打てっていうじゃない。君にじらされているうちに、だんだん気持ちさがめてきちゃったんだよね」

「えっ、どういうこと？」

「どういうことって、そういうことだよ」

「だって、最後まではいかなかったけれど、ぎりぎりのところまでは……」

由美は、蒼あおざめた顔でいった。やっと、別れ話らしいと気がついた。

たしかに、妊娠するようなことまではしなかったけど、キスもしたし、ハードなペッティングまでは許している。

へ最後まで行かなかったのは、長いつきあいになると思ったので、彼に飽きられないために、それだけは、とっておこうと思ったのに……」

彼は、黙っている。

「じゃあ、どうなるの？ 私たち」

「別れようよ」

彼はあつさりいった。

「そんな……」

「新しい職場に行ったら、もっと素敵すてきな彼が見つかるよ。それに、面接のとき、きかれただ。『恋人とか、婚約している相手がいますか？』ってね。そのとき、『いません』って答えてしまったんだよね。むこうは、そんな女性がいたら、仕事も手につかないだろうし、勤務地とか、転勤についても、どこじゃないとイヤだとかいうので困ると思っているのが、ミエミエだったからね」

「どうして、恋人がいるっていつてくれなかったの？」

由美は、涙声でいった。

「あの銀行に受かりたかつたこともあつたけど、君とは、多分、もう駄目^{だめ}なんじゃないかという気がしていたからね」

「どうしてなの？ 私は、あなたと結婚するつもりだったのに」

「もし、深い関係になつてたら、責任とらなきゃ仕方がないけど、そうでないとしたら、結婚は、まだ早いという気がするんだよね。就職したら、当分は、がんばって、仕事一すじにいつて、結婚は、五年くらいあとになると思うし……」

中原は、さめた顔で、煙草^{たばこ}をつけた。

へ嘘^{うそ}だわ。私より仕事をとりたいというのは、口実で、本当は、別の女性が出来たか、飽きてしまったんだわ」

と、わかりながらも、由美は、とり乱して、半狂乱になった。

いつも、この人には捨てられるのではないかと思うような関係なら、覚悟が出来ていただろうけど、由美の場合は、彼に惚^ほれられていると思ひ込んでいたからである。

大学の二年のとき、熱心にいい寄つて来たのは、彼の方である。当時、由美には、片^{かた}想^{おも}いしている一年上の先輩学生がいて、最初は、気がむかなかつたのに、彼は、どこまでもアタックしてくる。

「映画に行かない」

とか、

「お茶飲みませんか？」

と、誘ってくる男の学生は多かったが、一、二度断ると、もういつては来なかった。それなのに、中原は、ケロッとして、またいつてくる。それも、軽い調子である。

「ね、映画行こうよ」

といつて、断ると、

「じゃ、この券あげる。一人で行つてもつまらないからね。誰かへ行つてよ。なるべくなら、女の子とね」

と、二枚の前売券を渡して行つてしまう。

「今度出来た、『ハーフ』って店へ行かない？ 一人で嫌いやだったら、友達と一緒いっしょでもいいけど」

と、喫茶店へ誘う。

喫茶店くらいならと、友だちと一緒にに行っているうちに、大学のそばの店で、昼食をおごられ、やがて二人でパブへ、という風に、いつの間にか、のせられていった。

キスも、最初は、

「手にキスさせてよ。手だったら洗えばすむじゃない？」

といい、やがて、額になり、次には頬ほおといいながら、あつという間に唇にしまつ

たというわけで、いつも、一方的に彼が惚^ほれていて由美が優位にいたはずだった。

「好きだよ」

とか、

「愛してる」

と、いつもいつてくれたから、まさか、彼に捨てられるとは思ってもみなかったのだ。由美は、自分でも気づかぬうちに彼が好きになっていき、彼と結婚するものだと思ひ込んでしまっていた。

へ今さら別れられない

と思い、泣いても駄^だ目だと知ると、いきなり裸になって、

「じゃ抱いて」

とまでいったのだが、彼に、

「やめようよ。君らしくもない」

と、冷たく拒否されてしまった。

屈辱感に、蒼白^{そうはく}になった顔で、服をつけ、由美は、彼の部屋をとび出した。

軀^{からだ}を許さなかったにもかかわらず、由美は、深い傷を負ってしまった。

彼と別れて一か月の間、由美は、あきらめられず何度も、彼の家へ電話した。最初のうちは、彼も、仕方なく相手をしてくれたが、とうとう留守番電話になってしまった。「はい。中原です。只今、^{ただいま}外出中ですので、ご用の方は、また、掛け直してください」というテープは、彼女の電話を断るためだけのものらしく、留守番電話によくある、「ピー」という音がしたら、伝言して下さい。あとで、連絡します」という言葉は入っていなかった。

彼の姿を大学で見ても、「やあ」というだけで、さっさと行ってしまう。

由美は、落ち込んで、大学も休むようになった。

彼のいる東京にはいたくない。どこかへ旅行して、気持ちの整理をしたい。でないと、ノイローゼになってしまう。

と思い、最後の気力をだして京都までやって来たのだった。

京都は、観光シーズンで賑^{にぎわ}っていた。

お寺や、名所旧跡、どこへ行っても、仲のよさそうな新婚や、恋人同士の姿が目につく。

旅に出たことで、かえって、孤独感が増して行くようだった。秋という季節のせいもある。

二日目に、由美は、嵯峨野^{さがの}へ行こうと思った。観光案内のパンフレットに、嵯峨野には圧倒的に若い女性の観光客が多いと書かれていたからである。

その中にまぎれ込んでいれば、誰からも、異和感を持たれずにすむのではないかと思つた。

最初に行ったのは、天竜寺^{てんりゅうじ}だった。

さすがに、京都五山の第一位に位置するといわれる寺だけあって、壮大で、広々として
いる。

廻遊式^{かいゆうしき}という庭園には、樹々が紅葉して美しく、池には、大きな鯉^{こい}が泳いでいた。
じつと、鯉を見ているうちに、少しは、心が落ち着いてきた。

「へ京都に来てよかった」

そう思ったときだった。

「大きな鯉だなあ。これ、食べるかな」

と、うしろから声がした。

ふり返ると、二十五、六歳の背の高い男が、ジーパンをはいた同じくらいの年齢の男
と、パンをちぎっては、池に投げ込んでいる。

鯉は、たちまち集まってきた、まるで、ラグビーのボールをタックルするように、奪い合って食べる。

「この赤い鯉がボスかな？　こればかり、一人占めして食べてるなあ。もっと遠くに投げたらいんじゃないかな」

「駄目^{だめ}だな。うまくいかない」

男たちは、話しては、パンを投げていたが、由美が見ているのに気づくと、

「これ、やってみませんか？」

と、パンの端をわたしてくれた。

「ええ」

由美は、素直に受け取って、同じように、ちぎっては投げた。

全部やってしまうと、男たちは、

「ああ、もう終わりだ」

と、手を払い行ってしまった。

その男たちとは、次の野々宮神社^{ののみや}でも、大河内山荘^{おおこうちさんそう}でも、出会った。

大河内山荘というのは、俳優の大河内伝次郎の持っていた邸^{やしき}で、広大な庭からは、あたりの景色が一望できる。

女性が多いときいていたが、やはり、男女のペアが多かった。